

1920年代ドイツ青年心理学

鈴木 敏 明

I. G. S. Hall の青年心理学

青年心理学が発達心理学の独立した一部門として認められるようになったのは今世紀の初頭である。それ以前には、青年期は児童期後期として、主に思春期の生理的変化の側面が児童心理学の中で取りあげられていたにすぎない。

青年期を心理学的に研究することの必要性を最初に指摘し、且つその研究実践に着手したのは G. S. Hall (1844~1924) であった。Hall はアメリカ心理学会 (APA) の初代会長をつとめるなど (1892), W. James (1842~1910) と並んで、草創期のアメリカ心理学における代表的研究者である。彼は19世紀末から20世紀初頭にかけての「児童研究運動」の中心にあって、当時すでに児童心理学の分野において確固たる研究業績を発表しており、後に「児童心理学の父」と呼ばれるようになった人物である。1880年代に始まる Hall を中心とする研究者グループの一連の研究成果は、『青年期：その心理学ならびにそれと生理学、人類学、社会学、性、犯罪および教育との関係』(全2巻1904—1905)として発表された。

Hall は実験心理学の創始者である要素心理学者 W. Wundt (1832~1920) の最初の弟子であったが、上述の本の長い副題が示しているように、そこでは必理学を中心に据えながらも生理学、社会学、教育学などの幅広い分野から青年期の諸問題へアプローチすべきことが強調されており、実用性の次元において Wundt 的な心理学のイメージから大きく踏み出している。また、研究手法の面でも、面接法、手記法、各種の質問紙調査法や調査結果の統計的処理(記述、推測)など、青年心理学研究においては現在でも多用されている諸技術が初めて使用された。それらを駆使して得られたデータをもとに、客観的に青年あるいは青年期を記述しようという研究戦略は、それ以前には哲学的・思弁的な形での研究しか存在しなかったことを考えるならば、きわめて斬新で画期的なものであった。

Hall の青年期理論の骨格となっているのは、彼が「精神発生学」(Psychogenesis)と呼ぶものであるが、これは E. H. Haeckel の「反復説」(recapitulation theory)を、人間の発達過程を記述し説明するためのモデルとしてそっくり適用したものである。当時は検証の不十分さのために、ヒトとヒト以外の種における思春期現象の対応関係が反復説を支持するものと見做される傾向があったため、Hall の理論は相当の説得力を持っていたようである。またそれは J. J. Rousseau の自然主義・自由主義的人間観の発達心理学的翻訳でもあった。

Hall によれば、人間の発達は生理的因子によって必然的且つ不可避的に進行するものであり、ヒトという同一の種に属するかぎり時間と場所を超越して普遍的に共通する一定のパターンに従って生ずるということになる。これは身体・生理的側面に限られることなく、発達の各段階に特有の心理現象もまたこの制約を逃れることはできない。彼は自然の秩序として4つの発達段階を設定している。それらは乳幼児期(0歳~4歳)、児童期(4歳~8歳)、少年期(8歳~12歳)、青年期(12歳~20歳代半ば)であり、それぞれが次に述べるような人類の系統発生的段階に対応している。すなわち乳幼児期は四足歩行の動きであった時代の再演であり、児童期は有史時代初期の

原始的人類の段階、少年期は文明以前の未開で単調な野蛮人の生活段階、そして青年期は人類が徐々に高度な文明を創り出しつつあった時代に対応するとされた。特に青年期について Hall はドイツ文学史における "Strum und Drang" 期の精神的特徴（理想主義、人間的情緒の卒直な表現など）とのアナロジーを指摘し、青年期は「新生」(new-birth) にともなう「疾風怒濤時代」(period of storm and stress) であると述べている。彼の理論においては、青年期に特徴的な行動や心理は、すべて個々の青年が人類の系統発生の最後の段階を再演しているものであって、遺伝的に必然的且つ不可避的に生ずるものであるという具合に説明される。従って、青年を抱えた親や教師に対しては、青年に対しいたずらに制限的に臨むのではなくて、自然の秩序に従ってやがては健全に成熟するのであるから、青年の「発達のカタルシス」を尊重しつつ、彼らを自由な環境に置いて、干渉を控えて見守っていくという教育姿勢が推奨されるのである。

その後、Hall の精神発生学は、その根拠となる反復説が否定されたことによって、また十分な裏付けデータが得られなかったことによっても完全に放棄されたが、彼が意欲的に採用した研究手法だけはどんどん洗練され、高度化されつつ現在に至っている。今にして考えるならば、Hall の理論の崩壊は、目を覆わんばかりの dogma に依拠して無理な演繹を行なったがための悲劇であったと言えるだろうが、ideological な心理学においてはそれと似た現象は何度も繰り返されてきているのである。

科学的妥当性が疑問視されるようになってからも、Hall の理論は長いことアメリカを中心に青年観や青年教育に対して根強い影響を及ぼし続けた。Hall は後に「青年心理学の父」とも呼ばれるようになった。

Hall の青年心理学が20世紀初頭のアメリカに出現した背景としては、当時のアメリカ社会における青年の状況が指摘される。南北戦争(1861~1865)後、アメリカは技術革命を経つつ農業国から急速に工業国化していった。それまでのアメリカでは、特に富裕な階級を除いて、平均的青少年は普通12歳~13歳で学校を終了し、16歳頃にはもう結婚し、18歳ともなれば一人前のおとなとして生活を送っていたと言われている。しかし、工業社会への変化が進むにつれて工場労働者に対して要求される知的・技術的レディネスの水準が徐々に上昇してゆき、それは就学の一般化及び教育内容の量的増大をもたらした。その結果、平均在学期間は延長され、ひと昔前ならばすでに一人前のおとなとして扱われていたであろうはずの世代の多くが、社会の実際の生活の場から離れ、生徒或いは学生として、学校で一定の時期を過ごすようになった。すなわちこの時期に、アメリカの歴史上初めて大量の「青年層」が出現していたのである。

社会の急変に伴う諸々の歪みは、他の世代層よりも青年層に対し交互作用的に影響を及ぼし、この時期には、青少年の不適応行動、不道德な倫理観の蔓延、意欲の低下、そして世代間の断絶といった問題が社会的・政治的に注目されていた。そして、そのような青年層をコントロールするための know-how の開発が社会的要請として待望されていたのである。そのような状況のもとで、心理学的アプローチで青少年問題に答えようとしたのが Hall の青年心理学であったと言える。

これ以降、今日に至るまで、青年期研究の高まりの背景には常に青少年に対する社会的危機感の増大があるというパターンが繰り返されている。19世紀後半から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会における対青年意識の高まりと Hall の青年心理学の出現との関わり方はその先駆となったと言えよう。

II. ドイツにおける青年心理学研究

(1) 第一次大戦までの情況

19世紀後半に出現した W. Wundt の要素心理学は、感覚・知覚系の機能の精神物理学的測定に終始しており、思考、記憶、情動といったより高次の精神過程については手つかずの状態であった。まして青年期の心理発達というような、さらに大規模な問題については、旧来の哲学的・思弁的な発想のもとに、データの裏付けのない研究を細々と行なっていたにすぎない。

青年たちは安定したプロシヤ的世界の中で、権威ある伝統的教育システムによって、忠良な臣民たるべく教育されていた。当時のドイツ社会には、ことさら青年層の問題を研究しなければならない切迫した要求は存在しなかった。

(2) 第三帝国成立までの情況

第一次大戦での敗北を境にドイツ社会は急変した。大量の復員青年層を抱え込みながら、彼らに十分に職を与えることができず、社会には生活に対する不安や不満がいたるところで渦巻いていた。ロシア10月革命に触発された革命騒ぎ、暴動、ストライキが頻発していたが、その中心となっていたのはそのような復員青年層であった。ワイマール体制成立後も社会の動揺は鎮静しなかった。連合国による経済的挺入れも奏効せず、マルクは暴落し経済的には完全に破綻状態であった。その後この状態はやや持ち直すものの、1929年に始まった大恐慌の波の中で経済情勢はまたしても暗転する。このような社会情勢の中で、つまるところは戦場での荒んだ体験と失業とに起因する青年問題の解決が、緊急の社会的・政治的課題となっていた。青年層をコントロールして市民社会体制を維持してゆくためには、旧来の教育方法にかわる新しいモデルが必要とされていた。

1920年代に入ると、このような社会的要請に応える形で青年心理学の研究が活発に行なわれ、現在では古典とされているようないくつかの青年期の理論が形づくられた。Ch. Bühler の『青年の精神生活』(1921)、E. Spranger の『青年の心理』(1924)、O. Tumlirz の『成熟期』(1923)などは代表的な研究業績である。彼らは「荒れる青年層」を鎮静化し、共産化を防止するため、精神主義を基調とするワンダーフォーゲル的青年像を教育の目標像として設定した。総称して「精神科学的心理学」と呼ばれているこれらの理論では、青年期は内因論的・目的論的な説明原理によって解釈され、Hall の発生的発達心理学や、M. Mead や R. Benedict に代表されるような社会学的・人類学的アプローチは、人間の精神現象を研究するための方法論としては不適切なものとして軽視された。

Ch. Bühler (1893~1974) は、青年が書いた日記や手記をデータとして、それらを通してこそ青年の内面的な精神形成の経過や現在の心理状態を最も適切に理解できると主張した。『青年の精神生活』には日記的資料が豊富に採録されている。彼女は、精神科学派の中にあっては、青年期の生物学的基礎づけを容認した数少ない研究者のひとりであったが、精神生活を把握するための方法論としてまではそのようなアプローチを拡張しなかった。

彼女は17歳頃を境にして青年期を2つの時期に分けている。前半は青年期前期あるいは思春期(Pubertät)と呼ばれ、情緒不安定や反抗といった否定的傾向の強い時期であり、後半は青年期後期あるいは青春期(Adoleszenz)と呼ばれ、感情生活が安定し積極的な社会参加や創造的活動も見られる肯定的傾向の強い時期である。青年は誰でも、17歳頃を境として否定的なものから肯定的なものへの転回を経験するということである。

青年研究に日記分析法を適用するという着想は卓抜なものであった。今日においてもその評価は変わらない。近年いわゆる内容分析(content analysis)やstory表象の研究が進み、非定型的

文章から意味を抽出するテクニックが実用化されるようになってきたため、彼女の方法論は新しい意味においてさらに重要性を増したと言ってもよいほどである。但し、『青年の精神生活』において、彼女の理論にとって都合のよい資料だけが採用されているような所が見受けられるのは、理論の頑健性を疑わせる要素となっている。

O. Tumlriz (1890—1957) は青年期を児童期との比較において捉えている。すなわち外界の獲得時代としての児童期と、内界の獲得時代としての青年期である。関心の向く方向が外から内へと変化してくる契機となるのは、彼によれば性的衝動の出現である。児童期に小さなスケールで安定した心身状態は、性衝動の出現を機に不安定化する。その不快感が原因で青年の種々の否定的行動があらわれてくるのであるが、自我意識が高まって関心が内面的世界に集中するようになると、そのような不安定状態を内的世界における手当てによって安定化させようとするモーメントが働き、やがてスケールアップした形で安定するというわけである。それまでの自己イメージの集合は、スケールアップした自己意識の構造中に整合的に組み込まれる。

精神科学派を最もよく代表するのは、おそらくは E. Spranger (1882—1963) である。彼の『青年の心理』は各国語に翻訳され、世界中で広く読まれており、Hall の『青年期』と並んで青年心理学の古典的業績のひとつとなっている。彼自身1948年版のあとがきの中でも述べているが、この本は青年を抱える親や学校の教師用に書かれたものであった。そのため、ヨーロッパにおいては最もよく読まれた青年心理学のテキストでもあるという。

Spranger の思想には S. Freud の影響も認められると言われているが（汎性論には反対であったらしいが）、最も強い影響を受けたのは、彼の師であった W. Dilthey の思想である。Dilthey は H. Spencer らの生物学的心理学や連合心理学、Wundt 流の実験心理学を「説明心理学」であると批判し、自己の立場と区別した。彼は、人間の精神現象は全体的な「生」の体験を重視しつつ、「了解」(Verstehen) という手法によって、「構造連関」として捉えられなければならないと主張する。Spranger も Dilthey のこのような考え方を踏襲している。すなわち、青年を理解するには、その身体・生理的側面の変化に着目するだけでは不十分であって、青年それ自体だけではなく、彼を取り巻く歴史・文化的環境全体との意味的連関において、その心的構造を了解しなければならないというわけである。

Spranger は青年期を「第二の誕生」と表現した。これは、青年期が児童期の安定した心の構造が崩れた後にまったく新しい構造へと再編成される時期であるということの意味している。従って、そのような構造改編の発達の過程を理解することが青年心理学の中心課題となる。心の構造が変化しつつある徴候として、Spranger は「自我の発見」、「生活設計の漸進的形成」、「個人的な価値体系の選択と統一」の3点をあげている。自己と非自己との関係に注目することは、自我の形成へ向かう出発点である。鏡に自分の姿を映すことによって自分の外観を認知するように、非自己との関係において自己の姿を定義し測定していくうちに自我意識は確固としたものになってくる。それと並行して、未来の自分の姿（目標像、E. Erikson 流に言えば identity の対象像）と現在の自分の状態とを比較しながら、目標への到達ルートが考察・検討される。もちろん自我意識はこのような将来展望の予定線上でも定義されてゆく。また、目標像は、有名な価値の6類型（「芸術」、「学問」、「宗教」、「愛情」、「権力」、「効用」）の純粹型あるいはそれらの混合した中間型として表現できるものである。

Spranger は『青年の心理』1948年版のあとがきの中で、当時の「科学的」青年心理学を批判して、古い精神物理学の時代からつきまとっている偏狭な実証主義から脱しておらず、「事実の洪水」を整理して有効な青年期の全体像を示し得る理論は存在しないと述べている。精密さへの狂信に

走るのみの生命のない心理学は心理学ではない、という彼の批判は、多くの青年心理学者にとっては耳の痛い言葉であろう。しかし、そのように頑なに科学的手法の採用を拒絶し、精神科学的心理学のポーズに固執するところが Spranger の青年心理学の最大の弱点でもある。別の極端な言い方をすれば、彼の理論は客観的データによる検証にかけにくい非操作的で観念的な形で展開されていたので、Hall の発生的発達心理学と同じ運命を辿ることなく、今日まで生き残ってこれただけという皮肉な見方もできる。Spranger の青年心理学に対しては、総じて科学性の評価については否定的な見方が優勢であるが、そのことは Spranger 理論の致命傷とはならなかったことも確かである。彼が描いた青年像は、1920年代の北ドイツ中流階級の男子青年の教育において、指導上の *templete* としての機能を十分に果たした。それはドイツという範囲を超えて、例えば日本においても多くの信奉者を獲得したのである。

以上、1920年代ドイツ青年心理学を代表する3人の研究者の理論を概観してきたわけであるが、いずれも、彼らが所属するドイツの文化の中で手近に接近できる青年層を研究対象として、各自の内因論的・目的論的理論を展開した点が共通している。従って、Mead (1928) の指摘以来、今日では常識となっている socio-economic な、あるいは socio-cultural な変数を考慮したリサーチ・デザインなどはいっさい採用されていない。そのため、彼らが行なった理論の一般化は、その後、主に社会学的・文化人類学的アプローチからの厳しい批判を受けることとなった。

(3) 第三帝国時代の情況

1920年代に大いに高まった青年期研究の動きは、ドイツのナチ化(1933)の後急速に衰えていった。精神科学派が持ち出して青年教育のモデルとしたワンダーフォーゲル的青年像は、リベラルすぎ、且つユダヤ的であるとの理由から否定され、かわってヒトラー・ユーゲント的青年像が推奨される。そのモデルによれば、北方族神話のイメージを湛えた「英雄的且つ戦士的で、犠牲的精神の塊であるドイツの男子」(Friedrich & Kossakowski, 1962) が理想像とされ、女子はそのような英雄に性的に奉仕して子孫をつくるべき道具的存在とされた。

この時期、1920年代にあれば多発した青年問題は、ヒトラー・ユーゲントの外面的厳格さの陰で一見解消されたかに見えるが、それは不都合なケースが陰蔽されたために表面化しなかっただけのことのようなのである。W. Shirer (1960) 等の文献には、依然として多くの青年問題が発生していたことが報告されている。

Bühler 等のユダヤ系の青年心理学者の多くは追放された(Bühler はアメリカに亡命し U.S.C の教授となった。Spranger も一時期ナチスに教職を追われた)。

III. 1920年代ドイツ青年心理学の影響

既に述べたように、Spranger によって典型的に代表される1920年代ドイツ青年心理学——精神科学派——は、多くの国々に紹介され、それぞれの国の青年心理学史に一時代を画するスタイルを提供した。

その後、主に実用性と科学性という観点から、「了解」という方法の恣意性や、新しい科学的技法の採用を頑なに拒否している点、また、社会文化的要因の効果を考慮する際に比較文化的アプローチをとらない点等を批判され、住時の威光は失われてしまったように思われるが、いまだに多くの信奉者を青年心理学者の中に持っている。さらに、そこに描かれている詩的でロマンティックな青年のイメージは、文学作品や映画等のステロタイプ媒体を通じて広く一般にも流布しており、人々の「青年観」の中に生き続けている。例えば片岡・鈴木(1977)は、「青年とは～」という形で青年の多様な側面を記述した87個の項目(表-1)を用いて、現代の「青年観」の構造を因

表一1 片岡・鈴木(1977)で使用された青年を記述する項目

1. 大胆で冒険心に富む
2. 他人に影響されやすい
3. 自由と独立を求める
4. 大人や他人に反抗的である
5. 競争心が旺盛である
6. 他人にたよりやすく、依存的である
7. 他人の立場を思いやることができる
8. 異性に対する関心が強い
9. 考え方が合理的である
10. よく考えてから行動する
11. 理屈屋で理屈をこねるのが好きだ
12. 根本から自分を疑い悩みやすい
13. 他人に対して何かと攻撃的である
14. 空想にふけりやすい
15. 他人が自分をどう見ているか、いつも気にする
16. 他人を無視して自分の利益だけを考える
17. 立身出世など社会的成功を重視する
18. 偏見や古い考え方にとらわれやすい
19. 流行やファッションにのりやすい
20. 社交的で積極的に人とまじわる
21. 活発で行動的である
22. 暗くて陰気である
23. いつも自分をよく見せようとする
24. 他人に献身的である
25. 金持ちなど経済的に豊かになることを重視する
26. しきたりや習慣を大切にする
27. 自分と違う他人の意見でも尊重する。
28. 孤独を好む
29. 行動が無責任である
30. 明るくいぎいきしている
31. 他人に対して何かと批判的である
32. 義理人情にあつい
33. 家庭生活を重視する
34. 世間体を気にする
35. 社会の不正や貧困に怒りをもつ
36. 感傷的でセンチメンタルになりやすい
37. 気分がよく変わる
38. 協調性があり、他人とうまくやれる
39. 新しいものをすぐ受け入れる
40. 社会の不正をある程度しかたのないものだと考える
41. 粗野で荒々しい
42. 社会変革に熱心である
43. なまけもので怠惰である

44. ロマンチックな物思いにふけりやすい
45. 責任感がある
46. 協調性がなく、なにかとひとりになろうとする
47. つめたく残酷である
48. なにごとにも熱中しやすい
49. 内向的である
50. 考え方や思想に一貫性がなく、ふらふらしている
51. 理想にもえ、理想主義的である。
52. 自分に自信をもっている
53. 礼儀正しくない
54. 虚無的である
55. セックスなど身体的快楽をもとめる
56. 感受性が鋭く、感じやすい
57. 自然の美や芸術作品に感動しやすい
58. ものごとを一面的に考えやすい
59. 自分に自信がなく劣等感をもちやすい
60. 指導力や決断力がある
61. 衝動的である
62. 享樂的である
63. 情緒が不安定である
64. すぐカッとなる
65. 自分の考えが間違っていることがわかって、変えようとしない
66. ものごとを理性的に考える
67. 自分を客観的に、ありのままに評価できる
68. 自分を強く主張する
69. 壁にぶつかるとすぐ挫折する
70. 知識や学問など知的なものを追いもとめる
71. 友情を大切にする
72. 現実主義的である
73. しっかりした考えをもっている
74. 社会活動や政治活動に積極的である
75. 禁欲的である
76. 人間どうしの信頼関係を大切にする
77. 考え方が観念的である
78. 自己弁護やいいわけをよくする
79. なにごとにも無気力である
80. 困難にぶつかってもくじけない意志力をもっている
81. 理性より感情の方が強く、すぐ感情的になる
82. 芸術的才能が開花する時期である
83. 宗教に関心をもつ時期である
84. 将来の生活設計を立てる時期である
85. 自我のめざめなど、精神的に成長する時期である
86. 生理的にも身体的にも成熟する時期である
87. 運動能力がめざましくのびる時期である

子分析的に検討した。その結果、これらの項目は、それぞれ青年期の一定の側面を代表すると考えられるいくつかの因子を構成することが明らかにされた(表-2)。すなわち「青年観」を特性論的なモデルでもって記述できる可能性が示されたわけである。しかし、男子高校生以外の3つの被験者群においては、寄与が最大の因子について、一定の特性として意味的均質性を備えた因子であるという解釈はなされ得なかった。それらの因子はいずれも雑多な項目によって構成されており、片岡らはステロタイプ化した「青年観」を代表する因子であろうと解釈している。この因子が、青年期への commitment が比較的希薄であろうと考えられる被験者群(成人男女、女子高校生)において得られたことが、そのような解釈を支持する事実として指摘された。さらに、このようなステロタイプの因子が抽出される理由については、青年期を今現在現実に関与する問題として体験していない人々の場合は、過去に小説、映画、教科書(保健体育や倫理社会)等の媒体を通して得た「ステロタイプの青年観」がそのままの形で、自分の経験的判断を経ずに表明されるためであろうという示唆がなされた。青年について何らかの問題に突きあたると、その原因を

表-2 因子負荷行列

			寄与	
因子番号	#1		↓	
	→	.463		
表-1の項目番号	→1	.479←		
	29	-.513		因子負荷量
	80	.509		

- ・ 因子負荷量は、主因子解を規準バリマックス回転したものの。
- ・ 第6因子以下省略

男子高校生

#1	#2	#3	#4	#5
7.463	6.899	6.657	5.050	4.810
1 .479	4 .529	7 .457	18 .737	23 .478
29 -.513	11 .494	20 .722	26 .657	41 .460
30 .492	13 .565	21 .831	42 .586	55 .469
40 -.510	16 .531	22 -.769	74 .718	61 .488
52 .700	31 .615	27 .417	77 .497	82 .660
54 .477	37 .543	48 .843		85 .498
59 -.766	43 .574	57 .624		86 .600
60 .757	47 .509			87 .536
69 -.566	54 .624			
73 .765	64 .745			
76 .453	65 .592			
79 -.473	81 .613			
80 .509				

女子高校生

#1	#2	#3	#4	#5
7.751	5.611	5.492	3.764	3.290
10 -.468	11 .452	30 .540	42 .446	7 .475
29 .553	16 .639	48 .454	52 .553	10 .511
43 .539	17 .660	71 .682	60 .597	26 .532
44 .480	23 .506	76 .535	67 .590	27 .458
50 .605	25 .673	82 .458	74 .428	
56 .659	34 .470	85 .642		
58 .583	72 .487	87 .451		
59 .604	78 .411			
61 .454				
62 .502				
64 .509				
69 .456				
78 .498				
79 .483				
81 .452				

成人男子（高校生の父親）

#1	#2	#3	#4	#5
10.939	5.404	4.670	4.169	3.675
4 .484	10 .527	36 .453	4 .497	18 .472
11 .500	26 .751	39 .514	5 .575	22 .458
12 .471	27 .514	56 .494	15 .574	25 .565
16 .578	32 .575	61 .663	31 .568	34 .622
22 .463	60 .459	62 .469	56 .562	
23 .458	67 .494	63 .632	58 .553	
29 .627	80 .482	75 -.498		
32 -.461	83 .533			
38 -.536				
41 .487				
43 .626				
45 -.721				
46 .498				
47 .525				
49 .647				
50 .643				
54 .667				
59 .569				
64 .529				
65 .717				
69 .630				
78 .480				
79 .676				

成人女子（高校生の母親）

#1	#2	#3	#4	#5
9.448	6.168	5.168	4.902	4.041
33 -.557	4 .539	10 .636	30 .544	35 .600
47 .558	11 .653	24 .587	68 .459	43 .500
50 .587	13 .547	26 .482	71 .560	56 .493
53 .593	14 .484	32 .828	82 .496	66 .604
54 .696	16 .574	38 .513	85 .619	
55 .482	19 .672	46 -.476	86 .683	
59 .494	23 .511	56 -.586		
61 .553	25 .495	76 .481		
62 .706	39 .487			
63 .533	45 -.461			
64 .648				
65 .675				
69 .704				
73 -.456				
78 .648				
79 .746				
80 -.511				

調べることをせずに「もともと青年期とはそのようなものだから」式の説明がなされることはかなり多いのであるが、そのような判断の拠り所となるのは上記のような「ステロタイプの青年観」である。そしてその主な起源は、Spranger に代表される1920年代ドイツの精神科学派の青年心理学にもとめられるのである。

引用・参考文献

- Bühler, Ch. 1921, 4 Aufl., 1927
Das Seelenleben des Jugendlichen
(原田 茂訳 1969「青年の精神生活」協同出版)
- Friedlich, W. & Kossakowski, A. 1962
Zur Psychologie des Jugendalters
Volkseigener Verlag
- Hall, G. S. 1904—5
Adolescence: Its Psychology and its relation to physiology, anthropology, sociology, sex,
crime, religion and education. Vol. I. II.
Appleton & Co.
- 片岡 彰・鈴木敏明 1977
現代の「青年観」に関する研究(その2)
日本教育心理学第19回総会発表論文集, 476—477
- Mead, M. 1928
Coming of age in Samoa: A study of adolescence and sex in primitive societies.
Penguin Books
- 宮川知彰 1969
DDR における青年心理学の展開(2)
ソビエト心理学研究, 8, 12—24.
- Muuss, R. E. 1969
Theories of adolescence. 2nd ed.
Random House
(岡路市郎訳 1976「青年期の理論」川島書店)
- Shirer, W. 1960
The rise and fall of the Third Reich
Simon & Shaster
- Spranger, E. 1924, 27 Aufl., 1963
Psychologie des Jugendalters.
Quelle & Meyer
(原田茂訳 1973「青年の心理」協同出版)
- Tumlriz, O. 1923, 2 Aufl., 1927
Die Reifejahre.